



山本 竜司 新連載

「社会教育って対人援助なの？」という素朴な問いかけを受けたことが、対人援助学会に興味をもったきっかけでした。社会教育も学習支援という対人援助の一つだと単純に思っていた私は、あらためて「教育」や「支援」「援助」とは何かについて考えざるを得なくなりました。社会教育主事としての現場経験を言語化しなくては通信制大学院に社会人入学した私。現場、研究、日常を通して、社会教育の周縁を縁取りたいと思います。

社会教育の周縁
P314～

中谷 陽輔 新連載

初めましての方も多いこの学会で、ご縁があり連載を始めさせていただきます。

私は、社会福祉法人 盛和福祉会というところに勤めており、12年目となりました。正式な肩書としては、児童養護施設『京都大和の家』の家庭支援専門相談員 兼 児童家庭支援センター『山城こども家庭センターだいわ』の相談員と、えらく長い名称になってしまうので、ふだんは端的に、「児童福祉施設の相談員」と自己紹介します。拙稿にも、自己紹介がてら、家族のことを少し書かせていただきました。

家族でいうと、この短信を書いている時、妹に第一子が生まれたという嬉しい報告がありました。かたや自分の家庭では、この1週間ほど、季節の変わり目で妻と1

歳の娘が風邪をひいてダウンし、4歳でやんちゃ盛りの元気な息子も含めて、それぞれ質の異なるケアを展開する日々でした。かと思えば、その息子が、とあるNHKの番組に少しだけ映ることになって親が無邪気に喜んだりもして、なかなか慌たしい日々を過ごしています。

そうやって、いろんな家庭が、現在進行形で動いたり変化したりしているのだなあと、身近なところからしか考えを展開できない私は、しみじみ感じています。それではこれから、よろしく願いいたします。

コソダテ ノ シンリ
P316～

櫻井 育子

あるとき、誰かから「ひとり公共事業」と言われて、言い得て妙だなと、やや自虐的に自分の仕事について語ることがあったのだが、最近では、いろんな人がひとりずつ、ひとり公共事業を展開していけたら、ちょっとしあわせに近づいていくんじゃないか、など考えてニヤニヤしている。で、こんなことを考えてニヤニヤしている状態そのものが、しあわせな図だな、とあらためて思う。ご機嫌な大人が増えたらいい。気前のいい大人が増えたらいい、とそんなことばかり考える最近です。

わたしはここにいる
P312～

原田 孝

最近、いろいろなところで支援教育の在り方についてお話しする機会を与えていただいています。今回の私の文章でも触れていますが、考えてみると教育がそれ自体で子どもたちの成長発達の支援ととらえることができます。そこで子どもたちの成長発達をきちっととらえることができれば、それに必要な支援がおのずと見つかるかと私は考えています。そのような視点で、今回の私のお話しをお読みいただければ嬉しいです。

先生のための16のことば
P308～

鳴海 明敏

県庁職員を定年退職した翌月に新規開設された、情緒障害児短期治療施設(現

在は、児童心理治療施設)の園長を引き受けてから、13年目に入っています。

学園の各部屋には、それぞれ愛称がつけられています。職員室は「ほしぞら」、事務室は「あさひ」、医務室は「はるかぜ」、相談室は「こなゆき」という具合です。二階の子どもたちの居室には、オリオン、シリウス、タイタンなどの名前がついています。

この施設の開設を決意し建物を建て、私を園長に呼んでくれた前の理事長の、夢や希望が込められているような気がしています。園長室には「こかげ」という愛称がつけられています。ということで、サブタイトルは「こかげのにちじょう」とします。紹介する子どもたちについては、それなりのカモフラージュを施しています。

青森の秋は、冬支度に追われ慌ただしく、あつという間にすぎてしまうことがおおいのですが、今年の秋は、晴天がつづき、例年に比べて秋を楽しめているなあと感じています。それは、もしかしたら、10月中に車のタイヤを交換してしまったからなのかも知れません。夏タイヤに比べると冬タイヤは減りやすいと思っているので、これまではできるだけ、ぎりぎりまで交換せずに行こうと辛抱してきたのですが、今年はそんなところで節約・儉約してもしょうがないだろうと、奥さんとも意見が一致して、早々と交換したのでした。

児童心理治療施設の園長室から
～こかげのにちじょう～
P310～



高木 久美子

無事に3回目の連載の投稿をすることができほっとしています。

この3か月間は、対人援助学会への初参加や、主宰するボランティアグループでの視覚障害の友人のコンサート他、音楽関係の支援が2つ。そして意思疎通支援の活動の新たな連携と充実した楽しい期間

でした。3 回目の投稿に、その一部をご報告できることをうれしく思います。

ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！

P304～

きむら あきこ

またしても、本編は、「病」の話です。

11 月、コロナ感染しました。

夏に公開された映画、ベイビーブローカー、公開当初 2 度も続けて観ました。3 度目は、是枝監督のトークショーと抱き合わせ観る予定でチケットを購入していましたが、コロナ感染で、見事にダメになりました。がっかりです。健康は、つくづく大事だと感じます。

対人援助学会の年次大会には、オンラインで参加することができました。マガジン執筆者の方とも画面を通し交流することができました。「対人援助」になっていない、私の本編ですが、私自身の生きる力にはなっているようにも感じます。そんな解釈で、また、今号も書き残すことができました。

次号は「病」ネタにならないように、元氣な冬を過ごしたいと願いつつ…

かぞくのはなし

P300～

原田 希

毎年夏は、搾乳手袋の中が蒸して汗疹に悩まされるのですが、今年は手のひらや指の節々が真っ赤に腫れ上がるくらいに重症化してしまいました。アルコール消毒の日常化も肌には悪く、涼しくなっても治る気配なし。一時的に仕事を休んだり、水仕事などの家事も極力控えめに、ハンドケアに励みました。搾乳&水仕事で使うビニール手袋の下には綿の手袋をして、湿気ったら何回でも変える、めんどくさがったら治らないですよ、と病院の先生に言われて実行しています。パソコンで原稿を書くときも、車の運転をするときも、寝るときも、ハンドクリームを塗ってから綿手袋。たかが手湿疹、でも仕事や家事をやらないうわけにはいかない。一生治らないかもなあ…と洗濯した大量の綿手袋を干しながら暗い気持ちに。そこへ手伝いに来た夫が一言「千手観音？」なんて言うので吹き出してしまいました。笑って心に効くよなあ。一瞬で暗い気持ちが飛びました。今回の原稿では、一番近くが一番小さなコミ

ュニティ=夫婦のことをあれこれ書きました。結局ノロケやん！になりがちなテーマでアレですが、お時間ありましたらのぞいてください。

原田牧場Note

P204～

野中 浩一

私が住む島根県、その県庁所在地にある松江駅の周辺で、ここ 1~2 年空き店舗が増えています。つい先日はコンビニが撤退し、次に何が入るのかと見ていると入居募集の看板が。駅近くでいくつもの空き店舗が埋まらない状況を見るのは、16 年住んでいて初めてのこのように思います。

松江駅に IC カードが導入されたのが 2016 年 12 月。東京で IC カードが導入された 2001 年 11 月、当時東京に住んでいた私が、その日導入されたばかりの Suica を小岩駅に買いに行ってから 15 年が経っていました。都市部の発展が届くまでに 10 年以上かかる一方で、感染症や不景気の影響はすぐに届く印象の地方。

マイナスはすぐに届き、プラスは 10 年かかる。そんな時差がある地方の冬をどう乗り切るか。身近で寄り集まって、長い冬にだれもが暖をとれるよう算段しなければと危機感を募らせる昨今です。

「島根の中山間地から Work as Life」

P292～

畑中美穂

娘が子を連れて帰省した。滞在中に、ずり這いが、高這いに。つかまり立ちが、一人で立てるように。その子の、ある日の『今日のお仕事』。

①いちょうの葉っぱをちぎってほかす(50 枚ぐらい)。②お気に入りのぬいぐるみを、好き好きする。③風に吹かれながら、口笛をふく。④だっこひもの様子を調べる。⑤おかあさんのおにもつをたなから引きずり落とす(そしてなかを調べる)。⑥家庭内暴力 2 件; お気に入りのぬいぐるみが放り投げられる。もうひとつのお気に入り蹴られる。⑦びよんとなるものを びよんとして調べる(そしてなめる)。⑧階段を 16 段登る。

起きて、食べて、遊んで、寝て、また起きて。目に見えての“初めて”のことが毎日のようにあって。本当は私にも、気づい

ていないだけで“初めて”のことが毎日、起こっているのかもしれない。そのように思うと、いつまでも「まだまだ若造だな。ふふ」と思えてきた。シンプルな、喜びに満ちた日々であった。

一語一絵

P275～

渡辺修宏

「早く行きたければ一人でいけ、遠くへ行きたければみんなでいけ (If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together.)、とは誰の言葉だったのか？

たぶん、アフリカのことわざがルーツでしょう。一人で身軽に、早々とあそこに行くのもいいですが、ちょっとのんびり、でもがつつきっちりみんなで進むのも悪くないと思う今日このごろです」

対人援助実践をレポートする

この一冊

P279～



米津達也

山に登ると、山に登った自慢の話や、登り方の講釈、アクシデントに見舞われた武勇伝を、大方 4 割増して語るオッチャンが多い。それを見も知らぬ女性に語っているのだから、老害だろうとしか思わないが、自分もそうならないように気を付けないと…。しかし、山のオバちゃんたちは、そんな語り方はしないなあ

川下の風景

P273～

高井裕二

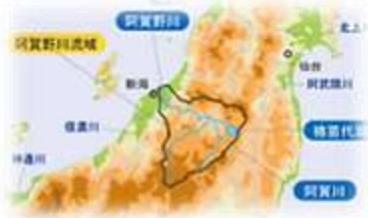
長時間のデスクワークが続いています。肩凝りが酷く、勤務先でも常に肩を回したり、揉んだりしていたところ、その様子を見ていた某先生から「ロイヒつぼ膏」の大判サイズをいただきました。大判サイズって

あったのです。貼ってみると血行が促進されたのか、気持ちいいです。常備しておこうと思います。いただいた先生に感謝です。

福祉教育への挑戦 P278

本間 毅 退院支援研究会

フォトエッセイ集『MINAMATA』の冒頭、作者のユージン・スミスは、ジャーナリズムにおける客観性のしきたりを除き、複雑な状況を主観的に理解することが重要¹⁾であると強調しました。また漱石は『草枕』で、四角に生きるべきところを、常識と名の付くひとつの角を摩滅した中に生きるのが芸術家である²⁾と説いています。



この原稿の締切りの6日前に、私は新潟から第14回大会開会を宣言します。コロナ禍が始まる半年前の2019年夏、私は「新潟水俣病資料館」で水槽越しにニゴイの「貴方に伝えて欲しいことがある」という聲を感じました。今号では、それから3年後の2022年夏、医師であり思想家でもある齋藤恒先生の物語を聞き、新潟水俣病の舞台となった阿賀野川流域に生きた人々の足跡を辿る旅を経て考えたことを述べたいと思います。



新潟水俣病概論 II (症候と認定基準の変遷) P268~

土元 哲平

2022年11月20日に、『転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー』（土元哲平、著）が、ナカニシヤ出版様より刊行されました！！出版社の方をはじめ、関わってくださったすべての方に感謝してもきれません。

これは、オートエスノグラフィーと文化心理学の接点を探究した著作であり、博士論文に基づいています。海外で滞在しての議論や、さまざまなキャリアに悩みを抱える人との出会いがなければ完成しませんでした。これをスタートラインとして、文化心理学や、熟慮的オートエスノグラフィーについて深めていきたいと思ひます。よろしくお祈りします。



キャリアと文化の心理学 休載

玉村 文

今月、対人援助学マガジンの読書会に参加させてもらいました。子育て経験者からの、「子どもがいることが人生にどんな影響を及ぼすか」という質問には、豊かな表現で応答があり収穫でした。この号では、子どもの病気のときの働き方について、経験から気づいたことをまとめました。そうしてみると、子どもの病気自体はネガティブな出来事ではあったのですが、学び得たことが見つかりました。子どもの病気をすべて予防できるとは思いません。その上でどのように働けるか、働く姿を見てもらえるのかを考える機会となりました。

応援 母ちゃん！ P216~

川畑 隆

この秋は長女の子どもの七五三（七歳）と次女の赤ちゃんの宮参りが続きました。七五三参りは伏見の御香宮、宮参りは宇治の宇治上神社。七歳の着物は孫娘が

自分で選んでレンタル、赤ん坊の上にかける着物は長女の宮参りから使っているから37年目の代物。両日ともとてもいい天気で、祖父母の私たち夫婦は、孫たちと一緒に久しぶりにお祝いしてもらって少し厳かな気持ちになれたし、きれいな景色の一部にもなれたし、おしんももんも食べられたし、いい日でした。

宇治に住んでいるから宇治上神社が身近なのですが、平等院・萬福寺・三室戸寺…の次に世間では宇治上神社があがってきません、世界遺産なのに。でもそれがいいのかもしれない。あのひっそりと佇む地味さは何物にも代えがたい。

その宇治上神社に代わって四番目に…じゃなくて、平等院もおさえてトップに躍り出ている(?)のが、パンの「たま木亭(たまきてい)」。エライ人気で各地から訪れる人で朝から大行列。たしかにウマイ！他の店のパンとちょっと…どころかだいぶ違う！おすすめはパイシュー？ いや何でも good。JR・京阪黄檗駅で降りるんです。パンを買い込んで、店の向かいの京大宇治キャンパスの芝生の上でパクつくのがおすすめだけど、12月じゃ寒いですね。それは春まで待ってください。ちなみに営業は木金土日。

かけだ詩 P211~

高名祐美

2年半ぶりに電車で旅をした。大学の先輩が、県外での研修会に講師として招かれ、そのアシスタントをするためである。

移動する電車の車中では、パソコンを開いて研修の打ち合わせをしたり、近況報告をし合ったり、駅弁を食べたりしているとあつという間に時間が過ぎ去る。そして夜はご当地メニューなるものをいただきながら、また話す。パソコンの画面越しではなく、直接会って話をするのが楽しくてたまらない。

研修会が終われば、おみやげを急いで買って、帰路につく。おみやげ選びもまた楽しい時間である。「旅行支援」の割引適用もしっかり受け、ご当地クーポン3000円分もおみやげや食事で使い切る。慌ただしいが旅気分を満喫できた県外への研修会参加であった。

コロナ禍でオンライン研修が主流となっ

だが、対面集合型研修も少しずつ実施できるようになってきている。対面では参加者の反応を目の当たりに感じ、講師と参加者のライブでのやりとりがスムーズにできる。反応がストレートに伝わってくる。グループワークもブレイクアウトルームではなく、会場内を歩いてすべてのグループを見て回ることができる。参加者一人ひとりの発言が聞こえてくる。全体も見渡せる。マスク着用でも、フェイスシールド着用でも、マイクの消毒をその都度しながらでも、対面集合型研修にはその魅力がある。オンライン研修は移動時間がなく、気軽に参加できるが、対面集合型研修には移動＝旅気分という嬉しいおまけがついてくることを体験した。

フリースクールでのSW実践を考える P200

岡田隆介

「子ども・家族の理解と支援」というテーマで、実際の講座をイメージして作ってきました。この歳までしゃべってきたことや感じたことを、こういう形で残せてよかったと思います。書き残しも思い残しもないので、これで終わりにします。書き残す機会を与えてくださった方々、見ていただいたみなさまに感謝いたします。

エア絵本

ビジュアル系子ども・家族の理解と支援 P35～

ありがとうございました。(編集長)



一宮 茂子

【「りくりゅう」フィギュアスケート NHK 杯優勝】

皆さまは「りくりゅう」って知っていますか。それは三浦璃来さん(20歳、145cm)と木原龍一さん(30歳、175cm)のフィギュアスケートのペアの選手のことです。身長差30cm、年齢差10歳ですが、いつ見ても2

人の笑顔に癒され、観客の笑いを誘うような演技や、会場から拍手がおきて、今まで経験したことがないほどに楽しく温かい気持ちになります。2022年の2月におこなわれた北京オリンピックのフィギュア団体で日本勢初となる7位入賞、10月のカナダスケートでは優勝、11月のNHK杯でも優勝。今まで日本人のペアでここまで結果を残した選手はいないそうです。「りくりゅう」は今シーズンのアイススケート大会に出場した全ての大会で表彰台上がり、日本人ペア史上最高順位を連発しています。大型画面に映し出される2人の演技はもちろんスバラシイ。また2人の演技に笑顔が多くて、しぐさが爽やかでカワイイのです。私は一度見ただけで彼らの虜になりました。そんな場面が映し出されると会場からは沢山の拍手や笑いが生じます。そのため憂鬱なときの私は「りくりゅう」の動画を観て元気をもらっています。ずーとペアでいてほしいな。

生体肝移植ドナーをめぐる物語 P195～

松岡 園子

今回の原稿は、声で書いてみました。スマホの音声入力だと思っていただけよりも早く仕上がりますし、キーボードを打つ時間が短くなったことで肩もこらずに済みました。家事や移動をしている間に、スマホに話しかけているだけで原稿が仕上がって嬉しくなります。

キーボードを打つことで肩がこる方には、おすすめの方法です。

統合失調症を患う母とともに 生きる子ども P192～

杉江 太郎

子どもの福祉領域で働く杉江です。動物園に行く機会があり、それぞれの動物の出生地や生活歴などを見ていると、特に絶滅危惧種と呼ばれる動物は、その種の保存を意図して人にコントロールされていますが、限られた範囲の中でエコマップやジェノグラムが成立していることを知りました。例えば、ゴリラは、日本に20頭しかいませんが、その内の16頭が、東京、京都、名古屋の3つの動物園にいて、ジェノグラムとしても繋がってたりします。そ

して、その繋がりが、少し調べただけで把握出来てしまうほど狭い範囲に収まっていることや、その繋がりの成立に人為的な要素が多分に作用していることを知りました。ゴリラだけではなく、社会の中には様々な繋がりがあります。そうした繋がりに興味があることを再認識しました。

「余地」相談業務を楽しむ方法- P188～

浅田 英輔

冬である。雪がないところのほうが、風が寒かったりすることがあるが、それでもやっぱり雪はいやだ。ゼロじゃなくていい。それほど困らない程度にならないものか。頼むよ、令和ちゃん4歳。青森県(とか北東北とか)の自殺率の高さは、雪が関係あると思う。外に出て！人と会わないとね！！

臨床のきれはし P105～

三浦 恵子

久しぶりに対面型の学会に出席した。気になっている本や資料の受け渡しもスムーズで、自由発表もシンポジウムも盛り上がった。開催校において様々なサポートをしてくださった先生や学生さんにも感謝あるのみだった。

シンポジウムでは指定討論者を務めたが、その際に考えさせられたのが、まさしく「家族」の在り方だった。私自身、単身赴任を重ねながら介護家族としての人生を歩んでおり、子どももいない。こうしたことがスタンダードな家族ではないことは、地方にいけばそれとなく、時には率直に指摘されることも慣れた。

ただ、母の葬儀を契機に、震災遺児孤児支援の組織につながり、母の命日に合わせて少しばかりの支援金をお送りすることを続けたり、御縁があった子どもたちの施設とつながることで、血縁はないが「育ちを応援する子ども」たちはたくさんいる。また、仕事も将来の子どもたちの育ちを支える社会の屋台骨を育てるような面がある。そう思えば、私の人生は、多くの出会いに恵まれていると思う。

更生保護官署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という

観点から考える P179～

迫 共

安倍元首相の銃撃事件から明らかになった、自民党議員と統一教会の関係、宗教団体による高額献金や宗教 2 世などの問題…。2022 年の中盤はこの問題に大きな注目が集まりました。私自身が宗教 2 世であり、親との関係に葛藤を抱えてきたことから、前回の「毒親」、今回の「宗教 2 世」のテーマは、自身を振り返る機会になりました。

「宗教 2 世」は、保育や社会福祉のテーマとして考えるには、まだ早いかもしれません。書評エッセイというスタイルだからこそできる問題提起として、書かせていただきました。

職場では 2 年ぶりの対面での学園祭（関係者のみ公開）が実施され、少しずつ日常を取り戻しつつあるように思われます。さわやかな秋風の中、「どぶろっく」のお笑いライブを楽しみました。学生が選んだには、しぶい人選だなあ。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ P184～

黒田 長宏

本や雑誌以外は特に欲しいという小物が無い時期にさしかかったようだ。多分、9 月にスマートウォッチを初めて買ったが、私は基本的にネットで調べて欲しい物の最低限の最安値のものを買うことに決めているので今回は 3 千円の物を買ったが、スイカでタッチして電車に乗ることもないし、心拍数その他もそんなに気にしないが、電話がスマートフォンを取り出さなくても発信や受信ができるのは便利だと思う。電池の持ちを長持ちさせるためらしいが、時計の表示が 5 秒ほどで消えて真っ黒になるのが最初許せなかったが、いつの間にか許せるようになってきているようだ。それもこれも一番安い段階の物を買うからである。お金のことを気にしなければ、スイカその他が付いていたり、常時計が表示されているものもあるのだ。だが、あまりまだ使っている人も私の周囲では見えないような気がする。このように日常のアイテムで進歩を知ることになるが、進歩して心配なのは、ドローンが普及しすぎてしまい、頭に

落ちてきて大変なことにならないかということである。

<https://konnankyujotai.jimdofree.com/>

ああ結婚 P163～

尾上明代

朝ペランダに出ると、このところ毎日のように、カマキリが日の当たるスリッパのところにいる。大きさが違うので、別々の個体だ。植木鉢の寒さ除けのための段ボール箱の中で死んでいた個体もあった。寒くなってきて、そろそろ寿命が尽きるころなのだろうか。今日はスリッパの近くに巨大なのが一匹、棚の上の鉢植えのところに中型が一匹いた。中型君は私が棚の前を通ったとき、鎌を大きく振り上げ、「あの～、ちょっと～」と何かを訴えている。前の庭に行きたいのかなと思ったが、私に頼まなくても飛べばいいじゃない、と思った。でも、もしかして飛ぶ力がないのかもと思いつき、落ち葉に載せて庭に置こうとするとそのまま私の手に乗り腕を這ってくる。「それは辞めて！」と何とか振り下ろした。「そうだ、巨大君も一緒にしてあげたら、寂しくないかも…」と例により私の「擬人化発想」で、二匹を庭で引き合わせた。二匹は予想外の出会いにびっくりした表情。ギョロ～と目玉を回したかと思うと次の瞬間、驚くほど激しい取っ組み合いに。明らかに中型君がやられているので、「喧嘩はダメ！」とそれぞれ遠くに引き離れた。そういえば、カマキリはもともとメスがオスを食べるほどの習性だったと後で思い出した…。

エネルギーがまだあれだけあるのは良かった。皆、それぞれ与えられた環境で精一杯生きているんだね、と思う。寿命を全うしてほしい。

ドラマセラピーの実践・手法・研究 P76～

松村奈奈

今年の遅い夏休みは、北海道の東部から襟裳岬にドライブ旅に。その途中の小さな町、大樹町。宇宙交流センターが出来て、ホリエモンが移住してロケット打ち上げたりしている町です。でも、私がこの町に来て驚いたのは、海岸沿いこいくつも

並ぶ戦争遺跡のトーチカでした。ネットで調べてみると、太平洋戦争末期に旧日本軍が北海道東沿岸に造ったもので、網走から十勝・胆振地方にかけて 90 基程あるそうです。実際に米軍は上陸せず、使われることはなかったといひます。こんなところにトーチカ造ってたのかあ…知りませんでした。

誰もいないさみしい海岸で、波にさらされ崩壊しつつあるトーチカに触れながら、いろいろ考えてしまいました。



精神科医の思うこと P132～

柳 たかを

奇妙な時代を見つめる 本当に今は奇妙な時代だと思います。私は外出するときには一応マスクはつけますが、スーパーやコンビニに入る時以外はあごマスクです。店内では口までマスクし鼻は出して鼻呼吸しています。この騒動が始まった当初から今も、情報はほぼ SNS から得ています。ちなみに家にテレビはありますが、私はテレビを見なくなって久しいです。

最初は中国武漢から始まったと噂され、日本ではクルーズ船の乗客に感染者が出て政府が乗客の 下船を止めて連日メディアで船に閉じ込められた乗客の様子・健康状態が報じられました。騒動を横目で見ながら、友人達との集まりでは冗談で「これは生物兵器がアレしたのかもね」とささやいたりしてました。

そのうち、アメリカ・ヨーロッパなどでも感染が広がり、人が集まるカフェなどが休

業するよう になりました。数週間後、日本国内でもスポーツやイベント興行が無観客で行われるという異常 事態を目の当たりにします。

やがて唯一の救済策として緊急承認された注射薬が輸入され始め、これを接種すれば封じ込めが 可能とのことで自治体のトップ、国の対策委員会、有識者とされる教授らがそろって接種を勧め始めました。映画で見たような厳重な感染防止設備と防護服の医療関係者が、酸素吸入装置を装着したベッド に横たわる患者の治療にあたるニュース映像が流れるとやはり緊張感を感じ、こうした報道を毎日 毎日見ていると「接種なんてまだ早い」「考えた方がいいのかな？」に変わり、勤め先のトップから強く勧められ、強制ではないが打たないと周りの目が厳しいので、楽になりたいがために・・・

思うに(打つ)・(打たない)の間には非常に深い溝があるように思います。注射が感染防止に効果があるのか無いのかはともかく、打った人は打たない人の気持ちに寄り添って接種すべきかを考える努力をしなくなるように思うのです・・・もう打っていない人には戻れないのですから。

病院や接客業で患者さん・お客様と接する機会が多い立場だと接種を断るのは難しいと思います。でも自分は打ったからもう責任は果たしたと接種について考えることをやめるのは私は非常に 残念なことだと思うのです。

東成区の昭和 思い出ほろほろメモ
P135～

団遊

先日、同じく連載執筆者の幼稚園園長・鶴谷主一さんと話をする中で、彼が幼稚園の職員採用面接や入園を希望する保護者への説明に、この連載を活用しているという話を聞きました。自分がどういう考えで幼児教育に向き合っているか、行事とは何か、職員はどういう存在か、それらはすべて「連載に書いてあるから読んでおいてください」とメッセージしているそうです。聞いていて、「それはいいな」と思いました。

そこで早速、私も「連載に書いてあるから読んでおいてください」とレスポンスできるような連載に鞍替えしようと思ひ考へてみたところ、受ける質問は「経営」に関す

ることが多いので、「給料とは何か」「採用とは何か」「売上にはどう向き合うべきか」など、自分が実践の中で積み上げてきたものを単元化してまとめてみようと思ひ立ちました。

タイトルを「団遊の経営言論」として早速書き始めたのですが、まず着手したのが「給料」だったのが良くなかったのか、なかなかまとまりません。私はいくつか会社をしているのですが、振り返ると、個社ごとに給料との向き合い方が少しずつ違って、それらを包括する言論を述べようとすると、筆が止まるのです。

「筆が止まる」ということに出会えたのは、私的には発見であり、自省を深めるよい機会になったのですが、筆が止まると提出する原稿はありません。宿題は、次回に持ち越しさせてもらうことにしました。

休載

村本邦子

9月、セカンドステージに入った「東日本・家族応援プロジェクト+」で多賀城、白河、いわきに4泊5日で行った。

今年は長年あためてきた婦人相談員の物語に取り組んでいるので、その後、東京、岩手、青森、沖縄、山形、福岡とあちこちインタビューして回った。週末に出張が入ると、休日がなくなるだけでなく、その分のしわ寄せが平日にいつかなり忙しくなるのだが、それでも、コロナにもかかってしまったし、大きく型が変わらない限り今しばらくは大丈夫だろうと、調子に乗って、週末ごとの出張を楽しんだ。

多くの場合、温泉つきで、隙間の時間にプチ観光もねじ込んだ。気がつく、あっという間に年末だ。インタビューのまとめがまったくできていないが、年末年始に頑張ろう。我ながら元気だなあ。

**周辺からの記憶 一東日本大震災
家族応援プロジェクト**
P123～

國友万裕

大学の非常勤講師歴、いよいよ30周年を迎えます。

毎年、この時期になると来年の仕事は大丈夫なのかなと不安になります。非正規雇用の場合は不安定なので、この30

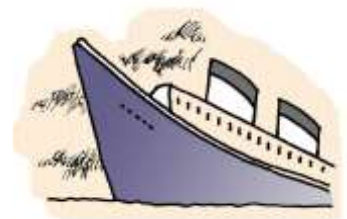
年間、その不安と毎年闘ってきたのです。でも、その一方で、融通が効かなくて、こだわりの強い性格の僕は、自分の好きなところでなかったら教える気力がなくなるだろうなあという懸念もあり、非常勤であることに満足している面もありました。

その僕もいよいよ来年の2月で59歳。大学の専任教員にはなれませんでした、京都の5大学で非常勤として教えられて、英語の他に、映画やジェンダーの授業も持っています。仕事の方は満足です。生活もどうにか成り立ち、貯金もわずかですがあります。非常勤講師として、一生を終えることができそうな見通しがたってきました。非常勤の定年は遅いところで73歳ぐらいなので、あと14年間、頑張るのもこれまでの半分の期間です。

これだけ自分のこだわりに執着して生きてこられたのは、ある面幸せです。これから人生の残り3分の1。こだわりはどうにか全うできるでしょう。幸い、キリスト教も勉強していて、死後の世界は必ずあるという確信も出てきました。

あとは、過去のトラウマを全て浄化して、多くの人に愛を与えて、心を清めて、クリスチャンにふさわしい人格になりたいと思います。それが僕の終活です。

男は痛い！
P93～



古川秀明

二回連続で対面の講演会&ライブを書かせて頂きました。以前なら当たり前のことで、こんなに幸せな気持ちになれるなんて・・・。

「幸せを手に入れるんじゃない、幸せと思う心を手に入れるんじゃない」という、甲本ヒロトさんの名言がありますが、まさにその通りだと思います。

まだまだコロナウイルスは安心できませんが、この「幸せだと思ふ心」を持続けることができるように精進したいと思います。

講演会&ライブな日々

西川友理

白鳳短期大学で保育者養成に、その他いくつかの場所で社会福祉士など福祉系専門職養成・および育成に携わっています。

今回は記録について書きました。記録と言えば、実習日誌をデータで作成してもいいという現場が最近いくつか見られるようになってきました。保育士の実習ではかなりレアですが、社会福祉士の実習ではちらほらと出てきています。もちろん情報管理には十分注意した上で、プリントアウトしたもの、時にはデータでの提出を許可しているような施設もあります。こういう実習先にあつた学生は、大幅に日々の日誌の負担が減ります。

「今回、日誌がめっちゃ楽になりました～！」

「よかったですねえ、PC で書けると便利よねえ」

「いや、PC 苦手です。書けません。」

「え、ど、どうやって書いてるの？」

「全部スマホで書いて、プリントアウトします」

「えー！スマホで？すごい！！」

「私からしたら PC のキーボードに慣れてる方がスゴイですよ！」

そういつて、電光石火の速さでスマホで記録、時には小論文なども書いてしまう学生たち。

かと思えば、「G メールって、スマホアプリだと思ってたんだけど、パソコンからインターネットをつなげば見られるんですね！便利！」という学生もいます。

発達凸凹、という言葉がありますが、学生の IT 関係の知識の凸凹は、なかなかびっくりさせられます。

などと言いながら、自分自身も IT には強い方ではありません。学生にビックリできるような自分ではないよな、私もきっと誰かにビックリされているよなあ、と苦笑いです。

**福祉系対人援助職養成の
現場から
P66~**

坂口伊都

この 11 月 19、20 日に Zoom で対人援

助学会がありました。初日の最初にマガジンの短信のワークショップがあり、楽しみにしていたのですが、何を勘違いしたのか午後からだと思い込んでしまいました。よく見ると 9:30 からになっています。気づいた時には終了。

「やっちゃった」

話聞きたかったです。私の場合、本文の方は原稿の締め切りに向けて、今回は何を書いているかなど思考を巡らせませんが、短信は割とギリギリに書くことを決めます。そして、それが思いつかないことが多々あります。本文より唸っている時もあります。皆さんの短信で楽しませていただいているので、書くことがないとそれなりにショックを受け、つまらない私が柳の下にうらめしやと出てくる姿が浮かびます。

学会の 2 日目の昼休みには、お気に入りのマグカップを割ってしまいました。学会の内容も濃かったですが、家の中でジタバタする私も濃かった 2 日間でした。

家族と家族幻想

P117~

河岸由里子

【宗教の問題】旧統一教会の話が、ずっと続いている。この問題は以前大騒ぎになって、その後いつの間にか消えていたので、考えもなかった。安倍元首相が殺害されたことで、大問題になって、国会議員、自民党などに大きな波が起こった。安倍氏のことが無かったら、これから先もずっと取り沙汰されずに終わったのだろう。こうした宗教がらみの問題は、決して統一教会のみの話ではない。ものみの塔、真如苑、真光、エホバ、等々沢山あるのだ。そこで調べてみた。

現在、日本において一定規模で持続的に宗教活動を展開している宗教の教団は 350~400 教団ほどと考えられ、新宗教の信者は日本人のおよそ 1 割を占めると推定される (Wikipedia) とのこと。右図は平成 28 年度のものであるが、聞いたこともないものも沢山ある。

あれだけ問題になった旧統一教会もまだ 56 万人もの信者がいるという。

人は弱い生き物である。心のよりどころが欲しいのはわかるし、人生のどん底にいる時は、紛い物だろうと何だろうと助けられるならすが。溺れる者は藁をもつ

かむ」のだ。

順位	教団名	信者数(人)
1	創生学会	8,270,000 (世界)
2	東洋の科学	11,000,000
3	正統道	2,700,319
4	富士大石寺信託会	1,887,881
5	聖光会	1,295,497
6	出雲大社教	1,263,503
7	天降教	1,191,422
8	神門福音堂教団	1,145,029
9	真如苑	877,405
10	パーフェクトリバイバー教団	868,571
11	大山のぞの御神事教団	800,000
12	聖教員光	800,000
13	神聖会教団	675,160
14	世界教団	608,222
15	世界平和統一家庭連合(旧統一教会)	560,000
16	天降教	514,872
17	白元真道会	500,000
18	天降の聖	498,121
19	天降大御神教	481,429
20	天降教	450,369
21	聖光教	429,979
22	真光会	364,989
23	神聖福音堂	350,000
24	ほんみち	319,000
25	浄土真宗新義会	300,000
26	真光教	297,990
27	世界真光教団	220,000
28	ものみの塔聖書宣教師協会(日本)信託会	214,172
29	天降教団	198,504
30	天降	168,079

一つの宗教を信じるのが悪いこととは言わないが、財産の全てを投げうってまで宗教に没頭するのは異常でしかない。

二世の問題もテレビで放映されているが、筆者の相談室にも以前某宗教の二世の方が相談にいらしたことがある。個人の財産を認めない、子どもは親と離れて集団生活をする、小中学生以外は領地から出ない、小中学生も学校の授業のみで、部活動などはできないし他児と遊ぶことも許されないなどの中で、おかしいと思って逃げてきた方だった。こうした方が他にもたくさんいるはずである。旧統一教会だけではない。

筆者も含め、余り宗教に拘らず、クリスマスを祝い、正月も祝い、神社のお祭りも楽しむような人間がほとんどのこの日本で、こんなに苦しんでいる人がいることを、対人援助職である我々はもっと意識していかなばと思う。

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐらうむ かかし 主宰

ああ、相談業務

P71~

先人の知恵から

P153~

岡崎正明

人と家族の支援を仕事にしたおかげで様々な気づきをもらい、自分の幸せにつながっているな一と感じることが最近よくある。

先日、九州に住む妻の祖母が亡くなっ

た時のこと。100歳を超えて老衰で亡くなった祖母は、ひ孫たち(私たち夫婦の子)を大変可愛がってくれていた。数年前までは在宅で、長期休みに帰れば遊んだり食事を共にしていたし、施設に入ってからでも帰省の際には必ず面会に行っていた。

祖母が亡くなったのは金曜の朝。昼過ぎにはその日の通夜と、翌日の葬儀が決まった。

最初妻は自分だけが帰るか、もしくは中学生の長男と小学校低学年の次女だけ連れて行こうと思うと言った。コロナ禍の葬儀。極力少人数でというのが今の傾向だし、小学校高学年の長女は、翌日朝から陸上記録会を予定しており、本人も楽しみにして練習していた。それを誰よりもそばで見っていた妻は、記録会に出られなくなるのはかわいそうだから…と述べた。

私は「できるだけみんな祖母とのお別れをしたほうがいい。今晚の通夜だけでも長女も連れて行こう。3人は葬儀まで残り、私と長女だけ夜の新幹線で帰ればいい」と提案した。タイトだが記録会には出られると。

それは私なりに「祖母と子どもらの関係性」「きょうだいの関係性」「長女の性格」などを考え出した答えだった。身近な人の死に向き合うことは、悲しいことだが子どもたちにとって大切な経験だとも思った。死は誰もが不可避なのに、現代社会では日常から見えないようにされすぎている。子どもらのことを大好きだった祖母が、それを身をもって示そうとしてくれる貴重な機会を、大事にしたいと思った。無機質な仏壇やお墓ではなく、棺で眠る祖母の姿とちゃんと向き合うことでしか、子どもらが学べないものがあると確信していた。

結果バタバタと私の提案通りで動いた。長女はとんぼ返りの移動で疲労していたが、葬儀に残りたいような発言もあり、会ってお別れできて良かったとも述べていた。もし自分だけお別れが出来ていなかったら、きょうだいとの差を感じてモヤモヤしていたかもしれない。子どもらみな初めてのお焼香や、棺に収まる祖母の姿を見て、いろんなことを知り感じる機会になったと思う。

後で妻から、義父母や親族も子どもらの参加に感謝していたよ、と聞かされた。しばらく会っていない親族も多い中、子ども

の存在が場を和ませたり、話題をつなげる役割を果たしたようだ。特に次女は最年少で、誰かれ構わず手遊びをしたりと可愛がられたという。

そういえば作家の五木寛之が何かの本で、葬儀の読経で赤ん坊の泣き声があるのが好きだと書いていたのを思い出した。命は必ず終わる。けれどつながり、続いていくことを感じるのだと。すぐ共感を覚えた話で、それ以来私は葬儀や通夜の場にいる子どもをみると、なんだか少し嬉しくなっていてしまう。

対人援助の仕事を経験してなかったら、こんな風に子どもや家族のことに想いを馳せられる自分になっていたのだろうか？自らの行動選択をできていたのだろうか？と思う。だから本当に私は運がいいというか、人に恵まれているというか。ありがたいことだなーと素直に感じている。

役場の対人援助論 P100~

大谷多加志

先日ついに家庭内でコロナ陽性が発生し、濃厚接触者となって、さまざまな仕事を再調整することになりました。自宅で仕事をこなしつつ、感染対策を取って過ごしていましたが、幸いにして家庭内感染には至らずでした。最小限で乗り切れたことはありがたくも、コロナ禍も2年を過ぎてついに第8波にのまれた…と感じます。

11月19日・20日は対人援助学会第14回大会に参加しました。対人援助学会マガジン編集部でワークショップを企画し、「リアルタイム執筆者短信」と称して、大会に参加していた執筆者に近況報告をお願いし、そのお話を受けて参加者との交流を図りました。詳細は巻末に学会参加記を掲載していますので、ぜひご覧ください。

また、12月23日(金)の20時から、対人援助学会研究会でお話させて頂くことになりました。現在の連載テーマを中心にお話する予定です。オンライン開催です。よろしければぜひご参加下さい。

今年度から対人援助学会の常任理事になりましたが、想像以上に学会関係の動きが増えることになりました。結果的にたくさん刺激を頂いて、充実して過ごせているので満足なのですが、やってみないとわからないことって、あるものです。

発達検査と対人援助学 P132~

団士郎



60代の前半に、娘に勧められて加圧トレーニングに通い始めた。よく続いていたがトレーナーの事情で7年余りで中断になった。しばらくタイ式マッサージに断続的に通ってみたが、その後、Dr.ストレッチに出会い、担当者が三代目(日野、小泉、藤井)になった。身体ケア歴12年余になる。

人間ドックは40歳になって、職場の案内で受けることにしてから35年間、ほぼ毎年。検査結果には反応しないことにしているので無駄かもしれないが、年に一度の身体モニターのつもりだ。

老化による当然の変化はあるが、緊急加療を要するようなことは今のところなく、飲み続ける薬もない。

精神的にはストレスを抱えたりする性分じゃないので、主観的には至って元気だ。

よく似た仕事の仕方(膨大なwebマガジンを編集・発行し続け、自著の出版やパフォーマンスと多方面に活発)で気になっていたS氏が、参議院議員に当選した後、鬱で休業中と聞いた。いくつになっても意欲的なのは良いことだが、新しいことで急激なストレスを抱え込むのは良くないのかもしれない。

私はやり慣れた世界で、出来ることだけを楽しんで生きていこうと思う。

晩年D・A・N通信 P49~

鶴谷 主一

令和4年9月5日に牧之原市の幼保連携型認定こども園において、送迎バス内に取り残された子どもが亡くなるという大変痛ましい事故が発生しました。ありえない腹立たしい事故でした。

さらに杜撰な園の杜撰な管理不行き届きにより起こした事故を受け、きちんとやるべきことをやっている園にも負担を強い

ようとしています。機械的な装置の設置を義務づけるというのです。そこで、原町幼稚園ではバスの後ろの窓に「後部座席確認済」というA4サイズのラミネートしたパネルをぶら下げることで回避できる方法を考えました。

そして、以下の文書を行政にも送ったのですが、残念ながら装置の設置は義務化されそうです。補助金に多額の費用をかけて故障のリスクのある装置を付けること、現場からしたら全く無駄なことだと思うこの頃です。

行政に送った文書(前略)『装置の設置義務など必要以上に費用をかけなくても私どもの園で一ヶ月以上以下の手順で行って来て、装置と同等のルーティーンを作り出しています。更に、止まっている車輛を誰が見ても一目瞭然というところ、加えて故障や故意にスイッチを切るなどの回避行動ができないことから、音などの方法より効果が高いと考えております。』

後部座席
確認済
◎



原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ [haramachi.k](https://www.instagram.com/haramachi.k)

ツイッター [haramachikinder](https://twitter.com/haramachikinder)

幼稚園の現場から

P60~

水野スウ

この秋は、うれしいことに各地への憲法おはなし出前があいつぎました。各地、と

いってもその3分の1くらいはzoomによるオンライン出前。いつも「紅茶の時間」をしている現場である自宅から、ライブ実況中継でお届けします、と言って語り始めます。

2年半前は、オンライン出前はとても無理、自分には向かない、とハナからお断りしていたけど、せっかくの種まきの機会を自分から手放すのはもったいないかも、と思いついて2年前から少しずつトライするようになりました。とはいえ、パワーポイントはいまだつれない私、もっぱら画用紙に手書き文字を大きく書いて、話しながらそれを画面でお見せする、パワポならぬ“ハンドポイント”方式で話しています。リアルと全く同じ、というわけにはもちろんいかないけど、それでも工夫さえすれば、オンラインでも、紅茶の場の空気感ごと、かなり伝えられる／伝わる、そんな手応えも今は感じるようになりました。

今号マガジンは、オンラインやリアル会場で最近話していることを中心に、私自身の語りアーカイブを兼ねて綴ったものです。ウクライナのことから、終わらない戦争、13条を生きるということ、統一教会のこと、改憲案のこと、いま沖縄で起きていること、そして「ぼろぼろの平和を繕え」という言葉について、などなど。

毎週の「紅茶の時間」は11月でまる39年がたち、40年目にはいりました。今日は、先週おはなしにいった中学校の保健室の先生が、生徒さんたちの感想文を持ってはじめて紅茶にきてくれました。締め切りギリギリでこの短信と原稿を発送したのち、さあ、今から中学生たちの感想を読むことにしましょう、熱いミルクティをいれて、ね。

きもちは言葉をさがしている

P80~

脇野 千恵

今、学校に行けない子どもたちの居場所(適応指導教室?とも言うけれど、何に適応しないので指導するのかよくわからないが)で働いている。子どもたちは、ぼつりぼつりとやってくる。「明日いきます!」と言って「やっぱり無理!」なんていうのは、日常のこと。学校現場にいた頃を思うと、なんとゆつくりと時間が流れていくことかと

思う。

今教室で人気のコミュニケーションは、「人生ゲーム」。昔、自分の子どもたちともよくやった。2回ぐらい買い替えたように思う。今教室には「平成版」「ジャンボドリーム版」がある。その時代を映しているゲームで、本当に飽きることがない。例えば職業では、パティシエ、工芸職人、タレント、エンジニアなど。火星に行って35万ドル払う時もあり、ギャンブルコース、キャリアアップなんてコースもある。たとえゲームであっても、人生はそうは上手くない。最終ゴールして一番たくさんお金を持っている人が1位。なかなか1位になれない子どもは、「なんでなん!」と悔しそうに言う。算数が苦手なのに、いつも銀行係を買ってでる中学生。なぜかお金の価値はわかるようで、テキパキとしている。一瞬でも夢や希望を持てること、学校では味わえないドキドキワクワク感が人気の秘密なのかな。子どもたちと対等に過ごせる時間を楽しんでいる。

こころ日記「ぼちぼち」part II

休載

中村正

10月は大きなことがあった。病気になったのだ。慢性硬膜下血腫。そういえば夏に頭をうったことがある。家のなかですべったときだ。加齢による影響だろう。三ヶ月かけて頭に血が溜まっていくことになった。それが脳の圧力を変化させ、言語に関する脳機能部分に圧がかかった。ろれつが回らなくなった。特定の言葉が思い出せなくなった。上手く書けない字がある。これはおかしいと思い、脳の画像をとってもらった。初期だった。脳外科の医師は、まずは漢方で様子をみましょうと。第1選択肢は五苓散という水の流れをよくする漢方なのだ。ひと月経過した脳画像は綺麗になりつつある。進行していたら頭蓋に穴をあけ、血を抜く手術だという。ごく小さな認知症体験をしたことになる。その初期の症状は数日間続いたのでずいぶん勉強になった。因果関係は究明できていたので安心して自分の症状を観察できた。まだ完全ではないので数ヶ月は漢方のお世話になる。身体を東洋医学から眺めることになった。漢方の理解はまた別の世界観や思想が必要だ。

そしてもうひとつ。お爺さんになった。娘に子どもがやってきた。しかし低体重児ということでひと月ほど入院となった。これは娘にはつらかったようだ。母親も面会禁止なのだ。搾乳をして二日に一回、一時間だけ会える。娘を励ますことしかできなかった。その一時間のうちに SNS で動画を送ってくれた。産まれた直後、一週間、一緒にいることができただけである。その後、ほどなくして退院。今は母子蜜着的に暮らしている。父親も育児休暇を取得できた。家族の蜜月である。あすはわら天神に家族でお参りにいくという。近所なのでついていくことにした。いろんなことがあるものだ。

臨床社会学の方法 P22~

千葉晃央

京都市の伏見には縁がある。私の本籍は京都市伏見区になっている。一人暮らしも、結婚生活も伏見区で始まった。結婚と同時に、本籍を伏見に移した。今も本籍地はそのままである。時々、当時住んでいた賃貸マンションの前を通る。20年以上が経過しても懐かしい。伏見の職場には20年近く通勤をした。担当利用者さんの家庭訪問もした。家族療法にも出会ったし、先生の仕事もさせてもらった。マガジン編集長にも大谷さんにも出会ったのは伏見である。

そして今日は、伏見区の手筋商店街のサンマルクカフェでこれを書いている。仕事の前の隙間時間である。気分転換に商店街を歩く。昔と変わらない街並みもあるし、変わったところもある。インドカレー屋があり、酒かすラーメン屋があり、スーパーがあり、マクドがあり、昔ながらのパン屋も、お茶屋も、牛乳屋も、本屋もある。いろんなことがこの街から始まった。私にとってはパワースポットである。

「もし、あの時あしていたら、こうなっていたかも…」とよぎることもある。人は決定を重ねて生きる。1日3万5000回選択決定をしているという話もある。そこそこの「決定」にはドラマがある。伏見はその決定をたくさんした舞台である。映画『すずめの戸締り』でも描かれた、時間の次元が同時に併存する描写はこれまでのSFでも取り上げられてきた。そういったことを人

は本能では感じているのかもしれない。そういえば、ゲシュタルト療法でも過去に起こったことは過去にあるのではなく、それを思い出す、その人の「今ここ」にある！ととらえる。そして「今ここ」にしかない！ととらえるとするならば、「今ここで」扱っていくことになる。そんなこと思いながらの帰りの「おけいはん」道中な伏見っ子でもある。今年も伏見区には定期的に通っている。それも私の元気の源だろう。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P19~

篠原ユキオ

『積み重ねる時間』

昔の漫画のアイデア帳をパラパラめくっていると、とても面白いのになぜか清書しなかったアイデアをたまに見つけることがある。その時は多分面白いと思わなかったものである。

若い頃に見た時は退屈だなと思っていた映画が歳を取ってその面白さに気づく事がある。自分の生きてきた時間がやっとならば誘ってくれるのだと思う。

本もそうだ。読み出してなかなかその世界に入りこめず、途中で挫折した本がある。つまらない映画は目をつぶってしまえば良いが、つまらない文章を我慢しながら読み続けるのは辛いものだ。だから読むのを止める。当然、そこには小さな文字を追うのが辛くなるという要素もあるのは否めない。

そんな中、先日からそういう過去の挫折本を読み直してみようと思った。目が疲れたと思ったらさっさとやめる。ちょっと時間があればまた読み出す。

とこれが、なかなか新鮮でスイスイ読み進められる。ちょっと得した気分になる。

慌てず、急がず、じっくり時間をかけて熟成させなければならぬモノがたくさんある。そういう事を人との関わり方にも感じるようになってきた。

『悟り』という大袈裟なモノではないが、良くも悪くも、これが『老い』という事なのかもしれない。



HITOKOMART
P220~

山下桂永子

今年もあと1か月。今年を振り返ってみると、2回旅行に行けたこと(沖縄と小笠原諸島)はとても良い経験でした。動き回ってその土地の文化を知り、美味しいものを食べ、その土地の方の話を聴くと、まわりまわって自分の人生が豊かになっていくような気がします。やはり私は、体験でいろいろと気づくタイプなんだなとつくづく思います。「Experience is, for me, the highest authority.」は確かカール・ロジャーズの言葉だったかと思うのですが、旅をしているとまさに体験を通して知識が理解になっていくのを感じます。今年には依頼を受けて人前でお話をする、という機会もありました。緊張と多弁のせいで1時間ほど声がカスカスになったのですが、やってみると知識を伝えるだけでも大変なのに、それを理解に落とし込むなんてなんとこの偉業に挑まねばならぬのかと戦慄しました。今回は、伝えることと、共有することについてのお話です。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために P143~

小林 茂

年何回か、異様にいろいろな予定や締め切り日が重なる月や日がある。それぞれの活動や取り組みは、ほぼ関連がないはずなのに、これでもかという程、同月同日となる。以前は、こうした状態がひどくストレスを与えるものであったが、最近は圧倒されることなく、一つひとつ解消する気構えみたいな意識が持てるようになってきた。

しかし、どうにも一つひとつのことがやっ

つけ仕事の感じがして消化不良のような残念さや気持ち悪さが残る。こればかりは、体力や課題に欠ける時間の限界があるので悩みが残る。自分のさらなるステップとして、自分の抱えることのできることを選別力やコントロールする力を養いたい。

生きることに課題が尽きない。

対人支援点描 P112~

藤 信子

コロナ下の状況で、不自由だと思うことが、考えや見解とも言えないようなことを、友人と話せないことではないかと気づいた。そのようなことを話すことは、会話と独語の中間にあるような類の機能だと思う。これは、思考を進めるうえで結構役割を果たしているようだと思う。私は、退職とコロナの始まりが殆ど同時だったので、家族以外と機能的ではない時間を持つことが無くなった。精神医療の状況が30-40年前と、あまり変わらない部分があるということは、時々話題に出るけれど、そのことを考えるには、日本の医療の状況、地域社会、精神医療にかかわるスタッフの教育-ところで、精神病のことを今ではどのように教えているのだろうか？-、その他、広くあれこれ連想を進めることが必要な気がする。そういう時、会話と独語の間のような話をしたいとふとっている。このような状況で思考がまとまらず、原稿執筆できなかったという言い訳をしている。

コミュニティの中で 連載

竹中 尚文

10月17日(月)に富山市に出かけた。今夏に亡くなった青木新門氏を偲ぶ会の案内状をもらったからだ。青木新門氏の『納棺夫日記』を読んだ本木雅弘氏が映画化したのが『おくりびと』だった。青木氏は映画が原作の意図を読み違えていると原作とすることを拒否したそう。富山市まで行くなら、上越市に行くことにした。姫路から往復1200kmを夫婦で運転した。

◆上越市は浄土真宗の開祖である親鸞聖人の流刑の地である。私はこの地に立ってみたかった。私は親鸞聖人の教義を理解し、賛同して信徒になった。一方で親鸞聖人の人生観に共感もしてみたいと

思っている。18日の上越は、冷たい雨が降っていた。親鸞聖人が上陸したであろうという砂浜に立った。灰色の空から連なるかのような日本海の波を眺めた。



◆宗教には理性と感情があるように思う。私には何も解らずありがたいと思うことなどない。一方で、理解だけで共感のない姿勢には「みずくさい」とも「無慈悲だ」とも感じる。今、話題の宗教団体の教義にどのような理解があったのだろうか。また、そこにはどのような共感があったのだろうかと思う。そこがまったく語られない宗教問題なんて、何を語っているのだろうか。

路上生活者の個人史 P90~

寺田 弘志

サッカーワールドカップ初戦、優勝候補ドイツに日本代表が逆転勝ちしましたね。翌日や翌々日、来院された患者さんに「観ましたか」と尋ねると、普段スポーツの話題が出ない方まで、全員観ましたという答え。寺田接骨院の患者さんの視聴率は相当高かったようです。

試合前は「ドイツに勝てる気がしないんですけど」と患者さんと話していましたが、そんな予測をしたことが申し訳なくなりました。患者さんたちにも「勝つことを予測していましたか？」と質問すると、これまた全員が「勝つとは思っていなかった。良くて引き分け」という答えでした。

「こんなチームでは勝てない」と解説者に言われたり、大会前の親善試合でカナダに負けたりして、期待されていなかったのがかえって良かったのかもしれない。ドイツも日本をなめて、油断したのでしょう。患者さんに「スペインに7-0で負けたとはいえ、コスタリカをなめてかかったら、どんなでもないことになりますよね」と話していました。

そうしたら案の定、1-0で敗戦。終始攻め込んでいましたが、コスタリカにワンチャンスをものにされてしまいました。

「コスタリカには勝てる」、だれもがそんな期待をしていなかったでしょうか？

コスタリカ戦の翌日や翌々日に来た患者さんたちにたずねてみたら、これまた全員が「コスタリカには勝てる」と思っていたそうです。

日本を油断させるためにスペインにわざと大敗して見せたとしたら、コスタリカは相当なクワセモノです。日本もスペイン戦は捨てて、コスタリカ戦で死力を尽くすべきでした。

今度は日本が追い詰められました。日本は必死になるでしょう。スペインがドイツに勝ってくればよかったです、引き分けたのでスペインも負けてはくれません。

でもスペインは引き分けでもいいので、守りを固めて体力を温存し、点を取りに来た日本の裏を突いてくるのではないのでしょうか。この号が出るころには結果が出ていますが、どうなっていることやら。

本文では「期待されすぎると筋緊張が高まって、100%の力が発揮できなくなる」という話を書きます。

接骨院に心理学を入れてみた

P172~

山口洋典

8月末からジムに通い始めました。事務でも、寺務でもなく、ジムナジウム、身体を動かす場所に、です。運動と言えば社会運動しかしていない、などと軽口を叩いてきたのですが、いよいよ自分で身体の重さを実感することになり、一念発起した、という次第です。1週間に1時間という、長きにわたって続けられそうなところから始めてみることにしました。

「なぜジムに来ようと思ったのですか？」というトレーナーの方からの問いに「健康寿命を延ばしたいので」と、ふと口について出てきました。人生100年時代という表現にはリアリティがないのですが、年始に父を亡くしたことの反動として、既に折り返し地点は過ぎているのではないか、という思いから、今のうちにできることから始めてみました。そうこうしているうちに、いわゆる老眼と呼ばれる現象も自覚するようになってきました。学生時代、中村正先生から「老いるショック」というギャグを聞いたとき、当時の私にはリアリティがなかった

のですが、今になって「なるほど！」とガッテンしています。



PBLの風と土
P166～

見野 大介

10月の個展も終わり、相変わらず溜まっている仕事を必死に仕事をこなす日々。気付いたらW杯も始まっているし、クリスマスムードにもなっていて、年末感が一気に押し寄せてきた。年内にどれだけ溜まっている仕事を納めることができるか、不安でしかない。

ハチドリ器
P5

荒木 晃子

この春、不妊治療の保険適用が始まり、生殖医療現場では医療者と患者からの困りごと、開業相談室では当事者から新規受診先の医療機関を、さらに通院中の不妊カップルからは転院先や保険適用に該当する治療内容に関する相談が続いている。そのさなか、子宮のないロキタンスキ一症候群女性を対象に、子宮移植の臨床研究の実施計画が報道された。海外では98例の子宮移植により、これまでに52の子が生まれている(2022年10月時点)。国内でも、2017年カニクイザルの子宮移植により妊娠が確認されたとの報告はあるが、人を対象とした臨床研究の申請は今回初である。対象は、国内に推定約3,500人いるとされているロキタンスキ一症候群女性のうち、20～30代の女性3人の予定で、移植前に「体外受精で妊娠可能な受精卵ができています」と、パー

トナーの継続した理解と協力が必須との理由から、「法律上の婚姻関係にある」ことなどの条件がある。子宮移植は、提供者と移植を受ける人の双方に大きな負荷がかかる手術が必要である。子宮がない女性が自分の卵子を使って子を持つ方法としての代理出産は、現時点で国内では認められておらず、また代理母が産んだ子は実子として認められない。確かに、子宮移植は法律上の母親(実親)になるための唯一の方法ではあるものの…。

生殖医学の進化についてゆけず(気持ちの整理がつかず)、今号はお休みです。そんなあなたの日常に、先月以降、2件の出産報告と2件の妊娠報告が届きました。年齢に関係なく、妊娠する喜びや、子を持つ幸せのおすそ分けをいただき、少しだけ救われた気分です。

生殖医療と家族援助
休載

工藤 芳幸

最近のFacebookより。「11/16 毎日複数の業務でいっぱいなので、それ以外の好きなことしようと、少し前のことで仕事帰りに能楽を観ました。能は「邯鄲」、狂言は「簸屑(ひくず)」。11月前半はオンラインで友人のインド舞踊の公演を観たり、同僚や長女が貸してくれた本を読んだりしました。人から借りる本は、自分だけでは選ばない本なので面白いです。これで今年の読了は20冊目。途中まで読んでいる本が多数。目標の50冊読了まではまだまだ。」新年の目標として、授業関係で読む本以外に50冊読み切ると決めたのは、業務に追われて読書体験が乏しかったからなのですが、今年も業務でいっぱいなのは変わりなく暮れていこうとしています。

複数の業務のうちの大きな1つが学会開催準備。来年の7月に勤務校の関西福祉科学大学で「第49回日本コミュニケーション障害学会学術講演会」の開催をすることになり、1年ほど前からぼちぼち準備を開始しています。この学会は言葉やコミュニケーションの障害に関わる医療や福祉、教育の援助職や学校教員が会員です。もうすぐ演題登録が開始するので、最近具体的な作業に取り掛かっているところ。今回は団先生にもご講演いただく予定で、今から楽しみにしています。

学会開催を引き受けた理由は、アカデミックな議論を深めることをつないでいく意味もありますが、どうも希薄になっている人と人のつながりを作る機会になれば…という思もあります。オンラインで気軽に参加できるものは随分増えましたし、そこでつながることもいろいろありますが、何かを共同で作る機会が随分と減ってきたように思います。開催準備委員会を立ち上げて、これまで一緒に何かをやってきた人たち、新しく出会った人たちと議論しながら作ってみる。そこで作った場で全国の参加者に新しいつながりができる。即効性はないかも知れませんが、だいたいの先になって何かを生み出せば良いなと思って頑張っています。

みちくさ言語療法
P207～

中村 周平

前回、短信すらも送り忘れてしまい、本当に申し訳ありません。忙しさを言い訳にすることもできず、ただただ私自身の日々の怠慢だと感じております。編集長の団先生にもお詫び申し上げます。

近況は、現在同志社大学で行っている研究活動が少しずつ形になっていることをご報告させていただきます。多くの方々に自身の思いが伝わっていること、また当事者目線だけでなく、学術的な観点から情報発信できる術を学べている今の環境と素晴らしい指導教員の存在に感謝はありません。

10月と12月に、日本スポーツ法学会という学会のシンポジウムで発表させていただく機会を頂きました。もしこの短信を読んでいただき、関心を持っていただけましたらぜひお越しいただければ幸いです。

ノーサイド
p88

安 發明子

去年通い始めた在宅支援の現場で、1年半の間に子どもたちの調子がみるみる良くなり、話していることが理解できなかった子どもの言葉が明確になり、とても元気をもらった。

今回の記事にも出てくる女の子はいつもプレイモービルを4体持っていて、それは自分とお母さんとワーカー2人。家族の

一員のように自分のそばにいる専門職。しかし、記事で書いたり口頭で「こんなに素敵な仕事なんです！」と伝えても異国の人の動き、話し方、関係性を伝えることは容易ではない。

そこでフランスの子育て在宅支援の元ワーカーが描いた漫画を日本語訳で出版する企画をしている。家庭をどのように支えることができるか、親子ともに支えられて困難を乗り越える、

日本の福祉の発展に少しでもヒントになることがあればと願っている。

<http://thousandsofbooks.jp/project/tara/>



フランスのソーシャルワーク P227～

中島弘美

2022年11月19日20日、第14回対人援助学会の大会が「新潟水俣病と私たち」をテーマに開催された。大会前に新潟水俣病についての研究会が2回あり、事前学習ができたこととてもよかった。

また、企画ワークショップで、「サステナブル(持続可能)な研究会のつくり方～学会設立以前から13年続く、対人援助学会研究会のセブンルール～」を研修交流委員会で行った。これまでのふりかえりと、今後につながるポイントをそれぞれの立場で話し、参加者からの意見もいただいたので、これからは継続可能！が約束された気がする。ありがたい！

今回は早速、第52回2022年12月23日(金)20～22時大谷多加志さん(心理相談員 京都光華女子大学)検査と対人援助学。さらに、第53回2023年2月

24日(金)20～22時 中鹿直樹さん(立命館大学)(仮)実践と研究を交差させる！実践現場を科学する！が予定されている。楽しみにしています！

カウンセリングのお作法 P32～

鶴野祐介

11月下旬のよく晴れた午後、妙満寺の取材がてら、岩倉へ紅葉狩りに行きました。実相院門跡の床紅葉の美しさもさることながら、岩倉駅から門跡へと続く川沿いの小径は、「これぞ日本の原風景」とつぶやきたくなる眺めでした。中でも、葉っぱが散りつくした後、朱い実だけが残っている柿の木はなんとも言えない風情です。これ以上観光客が戻ってこないことを願いつつ、来年もまた来ようと心に誓った次第です。

うたとかたりの対人援助学 P159～

小池英梨子

従妹の結婚式があり、久しぶりに実家に帰省しました。その日は静岡では珍しい規模の台風が直撃。鉄塔が倒れ、長時間の停電に一部地域では断水。式場は停電と浸水で結婚式は当日に延期が決まりました。しかし、AUケータイは通信障害も発生してしまい、「結婚式が延期になった」という連絡を回すことにも一苦勞。被災しに帰省したような感じになりましたが、実家で姉家族と両親と暇を持て余した従妹の子どもたちとのんびり遊ぶ時間は、それはそれで充実した時間でした。

そうだ、猫に聞いてみよう P146～

早樫一男

随分久しぶりの執筆です。現在は社会福祉法人「盛和福祉会」の児童養護施設/乳児院「京都大和の家」と併設している児童家庭支援センター「やましろ子ども家庭センター だいわ」の責任者の役割を担っています。この間、児童相談所から大学、そして、児童福祉施設と従事するフィールドは変わりました。一方で、変わらないのは「家族理解」を視野に入れた「ジェノグラム」と「家族造形法」の活用です。この二つは、元気で働ける限り、ライフワークとして続けたいと考えています。

家族面接の実践から 里親家族支援を考える P319～

中條與子

しばらくご無沙汰しています、中條與子です。

11月1日に編集長から「51号締め切りのお知らせ」のメールをいただきました。今回は「エッセイ」は難しそうだと思いますが、せめて「執筆者@短信」だけでも書きたいと意気込みました。あっという間に11月30日の今日がやってきてしまいました。

言い訳になってしまいますが、本業も毎月同じ時期に締切があり、こなすことが精一杯で、いつも編集部にお送りできない旨のお詫びのご連絡をしていました。

ずっと同じことを繰り返しているの、一生書くことができないと思い、少しでも書こうと、今回は、まっすぐ家に帰宅して、パソコンに向かって打っています。

エッセイは、今号もお休みをさせていただきます。しばらく書けそうもないのですが、久しぶりに自分の連載を読み返して、続きを読みたいと思いました。

自分の身体の全部からエッセイの続きを捻出することを考えると、それだけでクラクラと疲れてしまいますが、自分が続きを読みたいと思うと、クラクラとする疲れが軽くなります。この気持ちを忘れないように、本業をしながら、書くことができるように、考えていきたいです。

有り難うございます。これからも宜しくお願いたします。

休載

浦田雅夫

かなりな多忙になり、今回は休ませていただくことにしました。毎回、締切りにも間に合わない状態が常態化し編集長はじめ編集委員の皆様にはご迷惑ばかりで恐縮です。すきなことを書かせていただける機会があるというのは本当にありがたいことです。感謝しております。

社会的養護の新展開 休載